

十九、心照迷境

間違いを間違いと知らず、迷いを迷いと知らず。ずいぶんと粗雑な生き方をしてきたものではある。信心成就して、闇を照らすがゆえに、迷いが迷いと知れ、愚が愚と知れて、迷いを払い、愚を滅するのであるが、だんだんと年を経るにしたがって、粗悪な今日までの生活を思うと恥じないではいられないことである。「心照迷境」という文字は、『尊号真像銘文』に出ておる字であるが、聖人は「心照迷境といふは、信心のたまをもて、愚痴のやみを払ひ明らかにてらすとなり。」と釈せられている。『大無量寿経』には「修心仏法」とあり、これを「心を仏法に修す」と読む。仏法の正しい領解の仕方は「心修仏法」(心、仏法を修す)ではない。心が仏法を修めるのではない。心を仏法に修めるのである。仏法に心を修めていただくのである。

「心仏法を修める」哲学ならそれでもいい。ただ記憶して試験に通るさえすればよい仏法なら「心仏法を修める」でもいい。しかし真実の仏法はただの学問ではない。仏法そのものに全我を修めるのである。仏法の至極は念仏行である。念仏は名号である。名号は如来である。十方恒沙の諸仏如来、無量の菩薩を化生せしめる尽十方無碍光如来である。「心を仏法に修す」とは、この名体不二の名号に心を修められることである。しかし直接には、仏法は教えであるがゆえに、教えに心を修められることである。教えこそ動かぬもので、心は教えによって化導され、動かされ、生かされるものである。

衆生の我慢我執の心をもつて、仏法を修め、つかみ、握り、弄んではならない。それは幼児に剃刀よりも危険事である。傲慢を増長するがゆえである。すでに仏法に心を修むべきである。ただの頭、ただの胸、ただの耳、ただの足の働く所には仏法はあり得ないのである。それらの一をもつて仏法を握ればすべて邪見であり、我慢である。

『法華経』の方便品に次のような話が出ている。世尊が、舍利弗にむかつて、これまで説かれた菩薩、声聞、縁覚の三乗の法を開いて、一仏乗の大法を顕わさんとせられた時、比丘、比丘尼、信男、信女の四衆、五千人の一団は、仏に礼をなして退去した。彼らは罪根深重なるにかかわらず、いわゆる増長慢の人であった。すなわちまだ得ざるを得たと思ひ、いまだ証せざるを証したと思える人たちであった。偈には「みずから其の過を見ず。戒に於て欠漏あり、其の瑕疵を護り惜しむ。是の小智は己に出でぬ。」とある。「戒に於て欠漏あり」とは、戒を失つて守らないのを欠と云ひ、過ちが外に漏れるを漏りというのである。持戒の人よりも、この欠漏ある者こそ「其の瑕疵を護り惜しむ」瑕疵とは、きず、あやまち、欠点をいうことである。その瑕疵を懺悔せぬのみか、かえつてこれを大切に護り惜しむことである。

彼らは、彼らの得たる法を無上のものと思ひ、世尊のお言葉に驚きをなし、彼らの高慢ゆえに、大法の入るべき余地がなかったのである。彼らは侮辱を感じ不快でならないがゆえに、色をなして立ち去ったのである。

しかし世尊は、「黙然として制止したまわず」なすがままにせられた。そして舍利弗に「我が今此の衆は復枝葉なく、純ら貞実のみ有り、舍利弗、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く聴け、まさに汝がために説くべし。」と仰せられた。枝葉とは、彼ら増上慢の輩は、仏道の法器にあらず、樹の枝葉に類する者であるとの意である。偈には「衆中の糟糠なり、仏の威徳の故に去りぬ。斯の人は福徳少くして、是の法を受くるに堪へず。此の衆には枝葉なし、唯諸の貞実のみ有り。」と言われた。糟糠とは「かす」である。大高慢の者を、枝葉と言ひ、かすと言われるのである。後に残った者こそは「貞実」すなわち誠心誠意、大法の器たり得る者ばかりである。僇慢の人は世間にはびこる。しかしそれは、人間の糟糠である。枝葉である。不思議なるかな、大法の園は、必ずこの種の人を「仏の威徳のゆえに去らしめる」のである。世尊また「是の如き増上慢の人は退くも亦佳し。」と仰せられる。深く考えさせられる教説ではある。かかる人、いつの世にも絶えない。

道元禪師は、かかる増上慢の人を「不信実智」の人と言ひ、真実の法には「正信の大機」のみ入り得ると言われた。いかに人間としては、智慧才覚があつても、増上慢の人は「不信実智」の人であり、男女老少、貴賤道俗、学無学等々の一切を問わず、よく大法を信じ大法に生きる人を「正信の大機」と言われるのである。謹んで大法に生かされるものはみな正信の大機たり得るのである。

私は先に「修心仏法」とて、心を仏法によつて修めるのだ、心が御法を修めるのではないと言つた。しかるに「心照迷境」の文字は「心迷境を照らす」と訓読せられるのであるがゆえに、心そのものが、迷境を照らすのである。二つの世界はどう違ふのであろうか。

「心を仏法に修す」と説かれた時の「心」は、衆生心、すなわち迷える心である。この迷いに満ちた心は仏法に修めらるべき心で、主になつてはならぬ心である。それに反して「心照迷境」、心迷境を照らすと言われる場合の心は、聖人のいわゆる「信心のたま」のことである。宝玉の光るがごとく、信心は輝く心であるがゆえに、信心のたまと言われたのである。

如来の教法は、その一字一句といえども、行者の自証、信心と無関係なものはない。忠実なる教えの信奉者には、教えそのものが必ず信心を成就する。信心は、静かにその光によつて迷境を照らすのである。

しかし、信心はけつして「硬直心」ではない。よく信心が壊れたということを知り、しかし信心はけつして壊れるものではない。壊れたというは必ず「思ひかためた自力の心」である。思ひかためた心は、煩惱、貪欲の相にすぎない。であるからけつして迷境を照らす光ではない。かかる迷境を照らす光のない、自力の信は、増上慢を増すばかりである。

自力の増上慢は、教えを聞こうとしないで、自分の自力の都合のいいように、語らせようとす。したがって、貪欲の勝手のいい軟語や、賞讃や、弁解や、逃路や、英雄主義的高上りをするのに都合のいい言葉だけを、天の妙音と受け付けて、我慢を叩くような言葉は、はね返してしまふ。

「一。我ばかりと思ひ独覚心なること浅間しきことなり。信あらは仏の慈悲をうけとり申す上は、我ばかりと思ふことはあるまじく候。触光柔軟の願候ふ時は、心も和ぐべきことなり。されば縁覚は、独覚のきとりなるがゆえに仏にならざるなり。」
〔御一代聞書〕

蓮如上人の厳しいご慈訓ではある。独覚心はけつして迷境を照らさない。

人間の思惟が人間を照らしはしない。人間のすべては、照らさるべきである。信心が迷境を照らすと言われるが、真の信心の人は如来に照らされてあることを信ずるのである。「私の宗教観」「私の信心」「私の自覚」「私の考え」等々と、私を動すべからざるものにして、それで教えを左右し、如来とはこんなものだと言うのではなくて、み親のみ心こそ動かすべからざるもの、まこと、真実、金剛の信心であつて、私にこれによつて照らされ、こわされ、生かされ、動かされ、育てられてゆくのである。この世界は、事実以上の事実であり、血の流れた生きた生命の動きである。如来が直ちに衆生の上に無条件にものを言つて下さる世界である。

合掌し念仏する心は、独覚心の硬直から救われ、若存若亡の不淳心から救われて、如来のよき御心をよき御心と頂いたのである。この純なる願生心がみ教えを聞けば、一一心の中に融けてくださる。私どもの心の中には、まだみ光にふれない煩惱がある。言いかえると、まだ見出せない悪がある。まだ見出せない悪が足のとどまり場になつて、私の足を縛り、無碍道であるべき道を有碍にする。そこで教えが私の悪や愚痴を打つてくださる時、「心迷境を照らす。」とのお言葉が身をもつて知られる。如来の大信心が、迷いを照らしてくださることによつて、有碍の小路が打ち開かれて、無碍の念仏道を開顕してくださることである。

「心照迷境といふは信心のたまをもて愚痴のやみを払ひ明かにてらすとなり。」とはまことにありがたき世界である。

ああ。真実教、人間に生まれてきて、この教えに値わせていただいたこと、これより尊い、これよりありがたい、これより深い幸福はなかつたのであつた。合掌、念仏………精進。